



講演要旨  
【縄文】

# いま、北黄金貝塚に立って “JOMON”の価値を考える

福島県文化財センター白河館館長  
縄文遺跡群世界遺産登録推進専門家委員会委員長 菊池 徹夫



はじめて

多くの方にお集りいただき、ありがとうございます。『北海道・北東北の縄文遺跡群』の世界遺産登録実現に向けた皆さんからの関心の高まりを、ユネスコに提出する推薦書の作成に携わる者としても嬉しい思います。

私自身、伊達市には何回も来ていますが、最近では、早稲田大学で社会人を対象としたトラベル・スタディーという研修旅行があり、世界遺産の構成資産<sup>1</sup>を巡る中で北黄金貝塚を訪れました。この旅行は、2012年から始めたのですが、一昨日、ついにすべての構成資産を踏破しました。実を言うと、今日は、そのツアーの帰路、東京へ帰る参加者と離れてここに来ているのです。参加者に伊達市で講演をすると言ったら、「応援している」「東京にも『北海道・北東北の縄文遺跡群』を世界遺産にしたいと願っている人がいることを伝えてほしい」と言わせてきました。

さて、いよいよ世界遺産登録が近づいてきました。8月末には、1週間以上の時間をかけて現地審査のリハーサルを行ったところです。担当した各市町の学芸員や関係者は緊張感のあるなか大変だったと思いますが、縄文遺跡群を世界遺産にしようという活動をはじめてから10年近い年月を経て、ようやくそういう段階になったということですから、感慨深いものもあります。来年はいよいよ本番です。



世界遺産に登録されるには

世界遺産そのものについて語るには、大学の1学期くらい時間が必要なので、ここでは簡単に説明させていただきます。

世界遺産は単に優れた文化財に与えられる「賞」といったものではありません。世界遺産という考え方には、もともと、1960年代にエジプトのアスワンハイダム建設によって水没の危機にあったアブシンベル神殿を救おうということで国際的な手が差し

伸べられることになったのがきっかけです。

1972年にユネスコの総会で「世界遺産条約」が採択され、今日に至ります。世界遺産は、国際条約に基づいて遺産を護り伝えていくという「約束事」と言えます。

世界遺産に登録されるには、まず、遺産の「真実性」と「完全性」を証明することが求められます。ピラミッドなど明らかにそこに見える遺産は分かりやすいのですが、縄文はどうでしょうか。竪穴住居に代表されるように土と木の文化で、しかも多くが土の中に埋まっています。この真実性や完全性を証明するのは難しいことですから、縄文遺跡群を世界遺産にするのは並大抵のことではありません。

さらに、真実性と完全性を示した上で、「顕著で普遍的な価値」があることを証明しなければならない。「顕著な価値」は割と示しやすいのですが、問題は「普遍的な価値」の方です。日本の中だけで「日本の宝だ！立派だ！」と言っていてもだめで、ユネスコからは「世界中の人たちにとって価値のあるものですか？」と問われるのです。本日の講演のタイトルに「JOMON」という字を入れましたが、それは、外国の人に「縄文」文化を知ってもらうという思いで最近よく使うようにしているからです。

また、国内における「万全の保護措置」がとられているかということも問われます。世界遺産は「登録されたら完了」というものではありません。ユネスコは、それからが大事なのだとします。市民がしっかりと遺産の価値を理解して守っていく意思があるか、行政はしっかりと予算を組んで保護に取り組んでいくか、それも永遠にということです。

これまで、顕著で普遍的な価値を証明するために皆で頑張ってきましたし、万全の保護措置のための計画も練ってきました。これらをユネスコに提出する推薦書に記載するわけですが、今まさに、最後の最後まで手直しに取り組んでいるところです<sup>2</sup>。



## 農耕・牧畜なしで1万年以上も続いた定住生活

さて、ここからは、推薦書のアピールポイントを紹介していきたいと思います。

なんと言っても、縄文時代は少なくみても1万年以上の長きにわたって続いた文化です。これが世界遺産推薦にあたっての重要なポイントでもあります。

西方の歴史をみると、旧石器時代が終わり新石器時代になると、麦を作ったり牛を飼ったりという農耕・牧畜を始めました。それに対して、世界史的にみれば同じ新石器時代の段階にある縄文の人々は、農耕や牧畜はせず、採集・漁労・狩猟を生業の基盤としながら、しかも資源を追いかけて転々と移動するのではなく、一か所に住み続けることができた、つまり「定住」していたのです。このことは、竪穴住居や墓や大規模な貝塚などが証明しています。

さらに、定住生活を続ける過程で、数的観念や土木技術、共同作業や社会秩序なども発達していったと考えられます。



## 自然環境に適応した生活

世界一豊かと言われる生物多様性に恵まれた日本列島を舞台として、縄文人たちは資源を巧みかつ積極的に利用しつつ、人口が少ないこともあって、また、適切な維持管理を行って、周囲の自然環境や生態系にうまく適応したサステイナブル（持続可能）で調和的な生活を送っていたと考えられます。

それと関連すると思いますが、縄文の集落では、周りに壁や柵を立てたり、溝を掘ったりして外から入れないようにするといったことがなく、北黄金貝塚の風景がまさにそうですが非常に開放的です。外国の都市が城壁で囲まれていたり、「弥生」の集落に環濠があったりするのとは対照的です。

また、交通・交易システムがかなり発達していました。それは、黒曜石やアスファルト、ヒスイ、貝といった「もの」の移動だけではなく、情報や婚姻関係にいたるまで、近・中・遠距離地域と相当密接に交流していたと考えられます。



## 豊かな精神性「縄文スピリット」

外国の研究者たちに縄文文化の話をしていると、彼らは土偶などをみて「縄文スピリット」を感じると言って溜息を洩らすことがあります。また、土器の模様や装飾、ストーンサークルや貝塚などを見るにつれ、縄文文化の他に例をみないほどの豊かな精神性を感じざるをえません。

彼らが感心する縄文文化の精神性「縄文スピリット」

ト」を何とかもっとうまく説明して外国の方やユネスコに訴えたいものです。その時、貝塚の中に人の墓があり、貝塚が単なるゴミ捨て場ではなく、きちんと命を送り返すための場所なのだと教えてくれる北黄金貝塚の存在が大きな意味を持ちます。



## なぜこの地域、この遺跡群なのか？

北海道や北東北以外の地域で世界遺産の話しますすると、「どうして北海道と北東北の遺跡だけが世界遺産になるのですか？」ということをよく聞かれます。縄文文化の遺跡は北海道から沖縄にいたるまで日本列島全域にあるのに、どうして4道県17遺跡に限るのか。

簡単にまとめて答えることは難しいのですが、まず、前提として、世界遺産の直接の対象は不動産だということがあります。だから「国宝になるような立派な土器や土偶があるのにどうして世界遺産にならないのか」と言われても、それは無理なのです。ひとつひとつの遺物がいくら素晴らしいとしても、それだけでは世界遺産にはなれません。世界遺産の対象はあくまでも不動産、つまり「北海道・北東北の縄文遺跡群」の場合は遺跡それ自体です。

そして、この地域は、①縄文文化中核の地であり、しかも、「弥生」と最も遠いことから縄文文化が比較的ピュアに遺された地域であること、②時期的にも、内容的にも過不足ない遺跡が揃っており、17の遺跡それぞれが個性を發揮しあいながら集まって、構成資産全体の顕著で普遍的な価値を物語ることができること、③大規模な遺跡が状態良く遺されており、史跡指定もされてきちんと保存・管理されているものが多いことなど、世界遺産に推薦される価値のある特質を持っているのです。

更に言えば、この地域は、首長たちをはじめ住民・行政・関係者が早くから連携して強力に事を推し進めたからでもあります。



## 「北の黄金」を世界遺産に

お話しの最後に、一番大切で皆さんに伝えたいと思うことを申し上げます。それは、市民、特に有志・ボランティア・生徒・児童をはじめとする地元住民の自覚、誇り、決意です。それがこれからは、ますます「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録へ向けた最大の力になります。

伊達市にある「北の黄金」。この宝物を、皆さんと一緒に世界遺産にしたいと思っています。

ご聴聽ありがとうございました。

1 「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する4道県にまたがる17の遺跡。

2 2020年1月16日、推薦書がユネスコに提出されました。

(2019年8月31日 第22回だて噴火湾縄文まつりシンポジウム 講演)